脳水腫を伴へる腰薦部脊髄膜「ヘルニア」の1治驗例

富山県出町厚生病院(院長　大井敏雄)

澤　田　啓

Kei Sawada

(昭和26年3月7日　受附)

(本論文要旨は第50回北陸外科集談会に発表せり)

緒　言

嚢腫性脊椎破裂症に身体各部の畸形及び高度の機能障碍を伴ふことは決して少いものではないが，脳水腫の併発は比較的興味あるものである．最近脳水腫を伴へる腰薦部脊髄膜「ヘルニア」の1例を経驗したので之を報告する．

臨　牀　例

患者　檜○永○，7ヶ月，男，昭和24年10月18日入院．

家族歴には畸型の遺伝，黴毒その他特記すべきものはない．

現症歴は満期安産で，出生時頭部の大きさはほゞ正常で腰薦部に小鶏卵大柔軟な腫瘤を認め，表面皮膚は淡赤色光沢を呈し，当時その表面は濕潤してゐたが医治を受けて治癒した．腫瘤は縮小しないで次第に増大し，同時に頭部も次第に増大して來た．

局所所見は発育栄養共に比較的良好であつて，身長72cm，頭囲 50.4cm，胸囲 43cm，腹囲 40cm である．腰薦部背面中央に半球型林檎大の腫瘤があり，有茎の広い基底をもち，之を被覆してゐる皮膚は緊張して光沢があり，表面中央部は淡薔薇色及び灰白色の部分が相交錯してゐて小数の毛細血管の透影を認める．腫瘤は弾力性柔軟で，圧迫するとやゝ縮小する．腫瘤の内面には内壁と癒着せるものがあるかどうかは明でない．頭部顔面共に軀幹四肢に比べて大きく，就中頭蓋は甚だ大きい．大顱門は前後径，横径夫々5糎及び4糎あり矢状縫合は尚ほ閉鎖不全である．膝蓋腱反射やゝ亢進し，「アヒレス」腱反射は正常で，「バビンスキー」足蹠現象は陰性である．尿，尿の失禁はないが，生來便秘に傾きしばしば灌腸により排便をさゞると云ふ．下肢の力はやゝ弱いが運動障碍を認めない．知覚障碍の有無は不明である．「レントゲン」所見では第5腰椎に骨欠損個所を認める．

手術所見は腹位，骨盤高挙位で嚢腫頸部に横軸紡錘状皮切を行ひ，筋膜まで剝離し嚢腫頸部を露出し，ついで脊椎の破裂縁より剝離した．嚢腫に穿刺を行ひその内容より水様透明なる液を排除した後，嚢に縦切開を加へた．嚢腫内面は白色で膠様光沢を有する纖維膜よりなつてゐる．そして第5腰椎に相当した部に於て約小指頭大の裂隙を認め，その部より約幼児指大の脊髄円錐部が膝状をなして現れ嚢腫内面に癒着し，馬尾神経束の一部も亦，嚢壁に向つて索状に分布癒着してゐるのを認める．よつて之等神経を損傷しない様注意して剝離し，一部神経の関与せる被膜と共に破裂部の脊椎管内に還納せる後，茎部を結紮して嚢を切除した．その周囲筋膜に縦軸紡錘状切離を行ひ，之を両側から飜転して間隙を掩ひ密な縦縫合を施し，皮膚は横方に即ち筋膜縫合と直角の方向に縫合した．

術後経過は腹臥用「ギブス」床を作製して患児を腹位骨盤高挙位に固定し，縫合部に高圧の加はることゝ糞便による汚染を防止し，又ペニシリンの分割注射

(1日10万單位)を3日間なした．手術創は順調に經過して7日目全抜糸を行つた．8日目から創部に輕度の濕潤が認められたが，13日目には乾燥し，術後16日目に全治退院した．

考 按

本例に見られた嚢腫性脊椎破裂症は腰薦部脊髄膜「ヘルニア」の形態を呈し，それと同時に腦水腫を伴つたもので，脊椎骨欠損部より腦脊髄膜は椎管腔を脫出し，その內壁に脊髄円錐の一部と馬尾神經の數条の神經索条が癒着して嚢腫を形成し，從つて嚢腫內容は腦脊髄液中にあたかも神經組織が浮游してゐる様な恰好である．

元來，脊髄は初めはその長さ脊柱とほゞ同一であるが，脊髄の発育は脊柱及び脊髄膜のそれに比べて遲れ，その爲，各神經根は斜走して椎間孔から出るに至る．この狀態は下方に於て殊に著明で[19]，本症例に於ても，胎生初期に既に椎骨破裂部から脊髄円錐及び馬尾神經の一部が脊髄膜と共に脫出して嚢腫內壁を形成し，脊椎長徑の発育に從つて嚢腫壁に癒着した脊髄が牽引され長大となつたものか，將又脊椎長徑の発育不全の爲，脊髄膜「ヘルニア」嚢內へ過長な脊髄円錐及び馬尾神經の一部が屈曲し，脫出癒着したものであつたかは[29][15]，手術時の所見からは決定し難いが，いづれにせよ脊椎に比べ脊髄の著しい過長な形態を呈してゐた．

本邦に於て，現在迄に報告されたる本症例は余の1例を加へて75例で，男40例（53%）女35例（47%）である．

本症に於ける腦水腫の併発乃至は術後の発生に就て，Muscattelow[29]（1902）は腫瘤皮膚の潰爛を伴ふ嚢腫性脊椎破裂症と手術後の腦水腫との関係を論じ，かゝる場合の腦水腫は手術時の感染による輕度の漿液性腦膜炎と見做すべきで，從つて，現在又は過去に，相当期間被覆皮膚の潰爛してゐた嚢腫性脊椎破裂症は手術の禁忌と見做すべきだと云ふ．

本症例に於ても出生時に既に腫瘍被覆皮膚の濕潤糜爛してゐたことから，腦水腫の発生には糜爛面よりの感染が思惟せられる．

Broca[7]（1895）は潰爛性脊椎破裂症の6手術例中，3例に手術後腦水腫を発生し，2例は急性腦膜炎で死亡し，唯，1例のみ治癒したと言ひ，又，Bayer[6]（1897）は潰爛性脊椎破裂症の7手術例中，3例に腦水腫を生じ，3例は急性腦膜炎で死亡し，唯，1例のみ治癒したと云ふ．

勿論，腫瘍の皮膚が健全であつたMuscattelowの8手術例中，1例に輕度の腦水腫を発生してゐる．

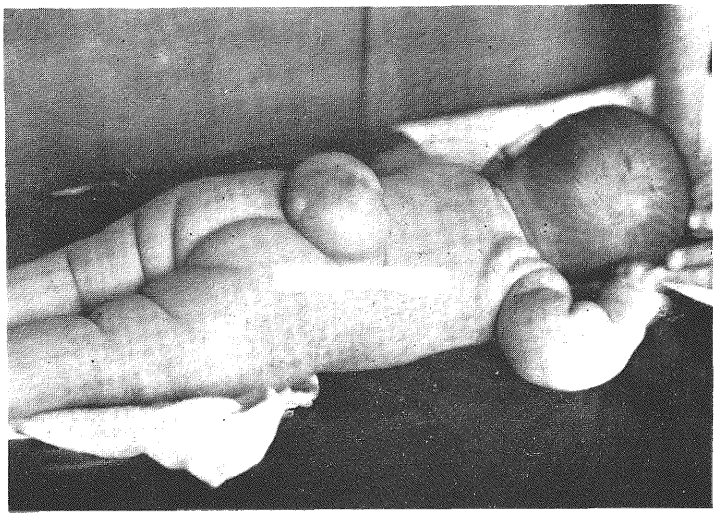
扨，本邦文献に腦水腫との関係を記載した症例は6例で，中2例[21]は脊髄膜「ヘルニア」で，術後腦水腫を発生し，夫々，71日及び1ヶ年目に死亡し，3例[22][21][37]は腦水腫を併発してゐたもので；受診時或はそれ以前に，既に，嚢腫壁被覆皮膚の潰爛のあつたものである．而して，現今手術禁忌と一応考へられてゐる腦水腫を伴ふものに手術を施行し，局所は完全に治癒したものは北川[21による]及び余の2例に見られるのみである．

結 論

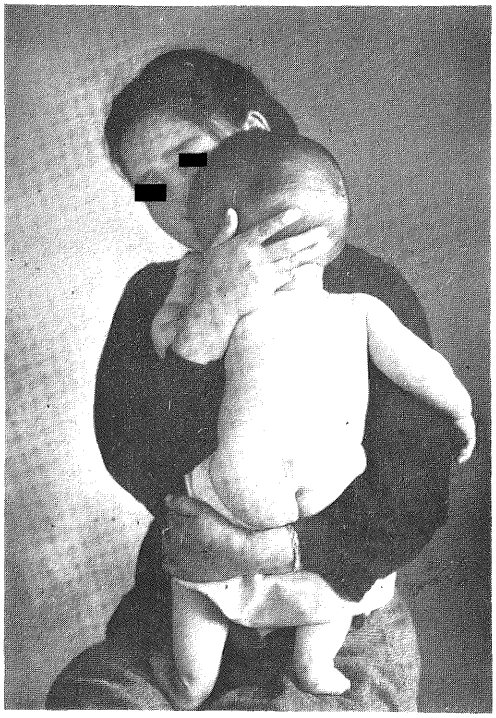
本例は腰薦部脊髄膜「ヘルニア」の形態を呈し，同時に腦水腫を伴つた処に特異な点があると共に，之を剔出し局所を全治せしめ得た症例である．手術時所見は第5腰椎骨破裂部から腦脊髄膜が脊髄円錐の一部と馬尾神經の數条の神經索条を屈曲癒着させて椎管腔を脫出し嚢腫內壁を形成し，脊髄は脊椎に比べ著しく過長な形態を呈してゐた．本邦に於て嚢腫性脊椎破裂の報告は本例を加へて75例で，中，腦水腫との関係を記載してある症例は本例を加へて7例に過

澤田論文附圖

手　術　前



手　術　後



ぎない．抗菌性物質の存在する今日，脳水腫を伴ふもの，又は潰爛せる嚢腫性脊椎破裂症と言へども，手術を敢て躊躇すべきではないであらう．

稿を終るに臨み御校閲を賜つた院長大井博士に万腔の謝意を捧げると同時に，種々御助力を戴いた学兄中島博士に深謝す．

文　献

1) **Adolf Hess, Fr.** : Ergeb. d. C. u. o. Bd. 10, (1918). 2) **Ahlfeld, Fr.** : Zit. nach Marchand……Die Missbildimgen (1897). 3) **東陽一** : 日本外科学会雑誌，41回，5号，(昭15). 4) **青木勇一** : 東京医事新誌，3163号，(昭14). 5) **Bockenheimer, ph.** : Langenbeck's Archiv. Bd. 65. S. 679, (1902). 6) **Bayer,** : Zeitschr. f. Heilkunde, Bd. 18, (1897). 7) **Broca,** : Revue dórthopédie. S. 38, (1895). 8) **Dareste, C.** : Recherches sur la production artificielle des monstruosités. Paris (1877). 9) **Ernst,** : American Journ. of med. Science, Bd. 175, (1928). 10) **Fischel, A.** : Beitr. Path. Anat. 41, (1907). 11) **Fleischmann. G.** : Zit. nach Marchand. 12) **Förster, A.** : Missbildung des Menschen. Jena.(1865). 13) **St. Hilaire, G.** : Zit. nach. Marchand 14) **Holmdahl, D. E.** : Gegenbaurs Jb. 54, u. 55, (1925). 15) **Hildebrand,** : Deutsche Zeitsche. f. chir. Bd. 29, (1889). 16) **Hildebrand,** : Archiv f. klin. chir. Bd. 46, (1893). 17) **花輪盛** : 九州医学会誌，40回，(昭15) 18) **石井吉五郎** : 医界展望，168号，(昭13) 19) **伊沢好爲** : 新胎生学，(昭15). 20) **Koch,**: Centralbl. f. chir. No. 14, (1882). 21) **久留春三** : 中外医事新報，第599号，(明38). 22) **桑原惣栄** : 臨床の日本，5巻，8冊，(昭12). 23) **古屋野宏平** : 医界展望，215号，(昭14). 24) **北里勇三** : 長崎医学会雑誌，18巻，1号，(昭15). 25) **Ledebeff, A.** : Virchows Archiv 86, (1881). 26) **Manchand, F.** : Die Missbildungen. Wien und Leipzig (1897). 27) **Marchand, F.** : Eulenburg's Realencyclopädie. 3 aufl. (1900). 28) **Meckel, J. F.**: Handbuch der Pathologischen Anatomie, (1812—1818). 29) **Muscattelow, G.** : Archiv f. klin. chir. Bd. 47, (1894). Archiv f. klin. chir. Bd. 68, (1902). 30) **荻崎爲行** : 東京医事新誌，第2694号—第2697号，(昭5). 31) **岡直友** : 皮膚科図説，49号，(昭14). 32) **Panum, P. L.** : Zit nach Machand. 33) **V. Recklinghausen** : Virchow's Arch. Bd. 105, (1886). 34) **Rokitansky, C.** : Handbuch der Pathologinhen Anat. (1842). 35) **Richter** : Anatom. Anzeiger, (1888). 36) **Sterenberg** : Virchow's Archiv, Bd. 272, H. 2, (1929). 37) **櫻井邦之助・中島仙七**: 日本外科学会雑誌，第34回，第1号，(昭8). 38) **住田正雄** : 神経学雑誌，第3巻，(明37). 39) **Thomas A. Schallow,** : Annals of Surgery Vol. 87, (1928). 40) **友保誠** : 日本外科学会雑誌，38回，5号，(昭12). 41) **辻村敬藏** : 日本外科学会雑誌，49回，10, 11, 12号（合冊），(昭24). 42) **田中義雄** : 治療及処方，214号，(昭12). 43) **上田正晴** : 東京医事新誌，3094号，(昭13) 44) **Virchows** : Virchow's Arch. Bd. 17, (1863). 45) **Winckel**: Münch. med. wsch. Bd. 17, (1896). 46) **Wernitz** : v. Bruns' Beitr. Bd. 25.